

総合的な学習の時間の考察と試み

澤田 敏志

1 はじめに

「総合的な学習の時間」は、平成10年の学習指導要領改訂の際に創設され教育課程に加えられた。創設の理由については、小学校、中学校、高等学校の学習指導要領解説総則編に「創設の経緯」が記されているので次に一部を紹介する。

…総合的な学習の時間については、これからの教育の在り方として「ゆとりの中で〔生きる力〕をはぐくむ」との方向性を示した平成8年7月の中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」（第一次答申）において、創設が提言された。この答申では、「生きる力」が全人的な力であるということを踏まえ、横断的・総合的な指導を一層推進し得るような手だてを講じて、豊かな学習活動を展開していくことが極めて有効であると考えられる」とし、「一定のまとまった時間（総合的な学習の時間）を設けて横断的・総合的な指導を行うこと」を提言した。

この指摘を踏まえ、教育課程の基準の改善について具体的な検討を進めてきた平成10年7月の教育課程審議会の答申において、今回の改善のねらいを効果的に実現するよう、各学校が創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開できるようにするため、新たに総合的な学習の時間を創設することが提言されたものである。

それでも学校現場には「なぜ今、総合的な学

習の時間なのか。」という疑問があった。

改めて平成8年7月の中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」（第一次答申）を見ると次ことが確認できる。

「これからの学校」の項に、「…これからの学校は〔生きる力〕を育成するという観点を重視した学校に変わっていく必要がある。」とあり、「学校が目指す教育とは」、「〔生きる力〕の育成を基本とし、知識を一方向的に教え込むことになりがちであった教育から、子供たちが、自ら学び、自ら考える教育への転換を目指す。」と示している。続けて、そうした教育を実現するために、学校は、「〔ゆとり〕のある教育環境で〔ゆとり〕のある教育活動を展開する。」「教育内容を基礎・基本に絞り、分かりやすく、生き生きとした学習意欲を高める指導を行って、その確実な習得に努めるとともに、個性を生かした教育を重視する。」と記している。また、「一人一人の個性を生かすための教育の改善」の項には、「小・中学校においては、教育内容の厳選によって生じる〔ゆとり〕を生かして〔ゆとり〕を持った授業の中で、子供たちの発達段階に即し、ティーム・ティーチング、グループ学習、個別学習など指導方法の一層の改善を図りつつ、個に応じた指導の充実を図る。また、自ら学び、自ら考える教育を行っていく上でも、問題解決的な学習や体験的な学習の一層の充実を図る。」とし、「横断的・総合的な学習の推進」の項を設けて先に記した「創設の経緯」が示されている。

つまり、教育が知識の効率的な習得を目指せば、細分化・体系化され、それらの細分化された知識は実生活の場面で統合され、[生きる力]となるはずであったが、知識の偏重化が進み、子どもたちの内面で生きる力として再構築されることは少なかった、という総括がなされ、新教育課程において「総合的な学習の時間」を新設し、各教科で行われている学習や特別活動が統合できる場を作り、[生きる力]を再構築することが必要であるという結論に至ったのだと理解することができる。

そこで、ここでは総合的な学習の時間について考察を進め、筆者が試みた実践を紹介する。

2 総合的な学習の時間への期待

総合的な学習の時間には、OECDが進める国際的な学力到達度に関するPISA調査結果の向上が期待されていると考えられる。

そこで、細分化された知識が統合され、[生きる力]と成り得るのかということはこの調査の「読解力」の結果に求めた。調査では「読解力」について、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」のことで示しているから、この結果は15歳の子どもの

内面で生きる力として再構築されているのかを確かめる手掛かりになると考え、資料②-1を作成した。

資料は、読解力の習熟度別結果を2000年から3回の調査について示した。調査結果は読解力の習熟度を高い方から低い方へ、レベル5から

1及びレベル1未満の6段階に分けて示した。

レベル3以上の生徒の割合に注目すると、フィンランドは、78.8%→79.8%→79.7%と3回の結果ともおよそ8割を保ち、韓国も75.6%→76.5%→81.6%と増加を続け8割を超えた。

日本は、72%→60.1→59.6%と2000年こそOECD平均を10%上回ったが、次の2回は辛うじて上回る程度であった。「総合的な学習の時間」が教育課程に加えられた平成10年(1998年)の学習指導要領の改訂から2年後の2000年と、5年後の2003年、8年後の2006年の結果は、年を重ねるごとに数値が後退している。この後退を止め、韓国やフィンランドに追いつくことが総合的な学習の時間の創設に込められた期待ではないだろうか。

3 学習指導要領の扱い ～節から章へ～

「総合的な学習の時間」の学習指導要領での扱いは、登場した平成10年の改訂では「総則」の「教育課程の編成及び実施」という「章」に、小学校と中学校は「総合的な学習の時間の取扱い」として、高等学校は「総合的な学習の時間」として、いずれも「節」として示された。

小学校学習指導要領総則には次の9項目が示された。

【資料②-1】PISA調査 読解力習熟度レベル別結果

(注：数字はパーセント)

国名	調査年	レベル未満	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5	3+4+5
フィンランド	2000	1.7	5.2	14.3	28.7	31.6	18.5	78.8
	2003	1.1	4.6	14.6	31.7	33.4	14.7	79.8
	2006	0.8	4	15.5	31.2	31.8	16.7	79.7
韓国	2000	0.9	4.8	18.6	38.8	31.1	5.7	75.6
	2003	1.4	5.4	16.8	33.5	30.8	12.2	76.5
	2006	1.4	4.3	12.5	27.2	32.7	21.7	81.6
日本	2000	2.7	7.3	18.0	33.3	28.8	9.9	72.0
	2003	7.4	11.6	20.9	27.2	23.2	9.7	60.1
	2006	6.7	11.7	22.0	28.7	21.5	9.4	59.6
OECD 平均	2000	6.0	11.9	21.7	28.7	22.3	9.5	60.5
	2003	6.7	12.4	22.8	28.7	21.3	8.3	58.3
	2006	7.4	12.7	22.7	27.8	20.7	8.6	57.1

OECDが進めているPISA (Programme for International Student Assessment) と呼ばれる国際的な学習到達度に関する調査

- 1 創設の経緯
- 2 総合的な学習の時間の教育課程上の位置付け、授業時間
- 3 総合的な学習の時間の趣旨
- 4 総合的な学習の時間のねらい
- 5 総合的な学習の時間の学習活動
- 6 総合的な学習の時間の全体計画
- 7 総合的な学習の時間の名称
- 8 総合的な学習の時間の学習活動の展開にあたっての配慮事項
- 9 総合的な学習の時間の評価

中学校の総則では小学校の6が削除され、高等学校の総則では小学校の2に「単位の認定」が加えられ、6が削除され、8に「職業学校における総合的な学習の時間の特例」が記された。

小学校の「4総合的な学習の時間のねらい」には次のように記されている。

- ①自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること
- ②学び方やものの考え方を身に付け、問題解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。

この二つに、平成15年の学習指導要領の一部改訂で次の③が加えられた。

- ③各教科、道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすること。

高等学校では、②の「自己の生き方」が「自己の在り方生き方」とされ、特別活動の目標と同様の表記を用い、③から「道徳」を除いた。

「5 総合的な学習の時間の学習活動」には、小学校および中学校とも「各学校においては、2に示すねらいを踏まえ、例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、児童の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題などについて、学校の実態に応じた学習活動を行うものとする。」と示され、平成15年の一部改訂で、「各学校においては、」以降に「1及び2に示す趣旨及びねらいを踏まえ、総合的な学習時間の目標及び内容を定め、」が挿入された。

高等学校も同様だが、「総合的な学習の時間の学習活動」に次の三点が例示された。

- ア 国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題についての学習活動
- イ 生徒が興味・関心、進路等に応じて設定した課題について、知識や技能の深化、総合化を図る学習活動
- ウ 自己の在り方生き方や進路について考察する学習活動

総合的な学習の時間の学習活動は、各学校が学校や地域の実情に応じて創意工夫を生かした活動を展開するとされるので、小学校及び中学校の、平成元年、平成10年、平成20年の学習指導要領の改訂に伴う授業時間の推移を表にまとめ、資料③-1、③-2として次に示した。

総合的な学習が登場した平成10年の学習指

【資料③-1】中学校の教育課程および総授業時間数の推移

学年	改訂年	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健	技家	外国語	道徳	総合	特活	選択	総授業時数
1年	平成元年	175	140	105	105	70	70	105	70		35		35～70	105～140	1,050
	平成10年	140	105	105	105	45	45	90	70	105	35	70～100	35	0～30	980
	平成20年	140	105	140	105	45	45	105	70	140	35	50	35		1,015
2年	平成元年	140	140	140	105	35～70	35～70	105	70		35		35～70	105～210	1,050
	平成10年	105	105	105	105	35	35	90	70	105	35	70～105	35	50～85	980
	平成20年	140	105	150	140	35	35	105	70	140	35	70	35		1,015
3年	平成元年	140	70～105	140	105～140	35	35	105～140	70～105		35		35～70	105～280	1,050
	平成10年	105	85	105	80	35	35	90	35	105	35	70～105	35	105～165	980
	平成20年	105	140	140	140	35	35	105	35	140	35	70	35		1,015

【資料③-2】 小学校の教育課程および総授業時間数の推移

学年	改訂年	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	道徳	外国語活動	総合	特活	総授業時数
1年	平成元年	306		136		102	68	68		102	34			34	850
	平成10年	272		114		102	68	68		90	34			34	782
	平成20年	306		136		102	68	68		102	34			34	850
2年	平成元年	315		175		105	70	70		105	35			35	910
	平成10年	280		155		105	70	70		90	35			35	840
	平成20年	315		175		105	70	70		105	35			35	910
3年	平成元年	280	105	175	105		70	70		105	35			35	980
	平成10年	235	70	150	70		60	60		90	35		105	35	910
	平成20年	245	70	175	90		60	60		105	35		70	35	945
4年	平成元年	280	105	175	105		70	70		105	35			70	1,015
	平成10年	235	85	150	90		60	60		90	35		105	35	945
	平成20年	245	90	175	105		60	60		105	35		70	35	980
5年	平成元年	210	105	175	105		70	70	70	105	35			70	1,015
	平成10年	180	90	150	95		50	50	60	90	35		110	35	945
	平成20年	175	100	175	105		50	50	60	90	35	35	70	35	980
6年	平成元年	210	105	175	105		70	70	70	105	35			70	1,015
	平成10年	175	100	150	95		50	50	55	90	35		110	35	945
	平成20年	175	105	175	105		50	50	55	90	35	35	70	35	980

導要領の改訂では、土曜日の休日に伴い小学3年から中学3年までそれぞれ総授業時数を70時間削減し、その上で、小学校で105～110時間、中学校で70～105時間を総合的な学習の時間に充てた。

しかし、次の平成20年に行われた学習指導要領の改訂では、教育基本法が約60年ぶりに改正されたことを受け、「21世紀を切り拓く心豊かな日本人の育成を目指す観点」から、総授業時数が、小学校1～2年は平成元年の改訂に戻され、小学校3年から中学校3年まで、それぞれ35時間が増加された。しかし、それは教科の授業時数に割り振られ、総合的な学習の時間は、小学校3～6年生および中学校2～3年生で70時間に、中学校1年生では50時間に改められた。

しかし、学習指導要領における総合的な学習時間の扱いは、平成20年の改訂で教科、道徳の後に新たに「章」として記載された。

4 総合的な学習の時間の目標

平成20年に改訂された現行の学習指導要領は、「総合的な学習の時間」の目標を次のように示した。

「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、

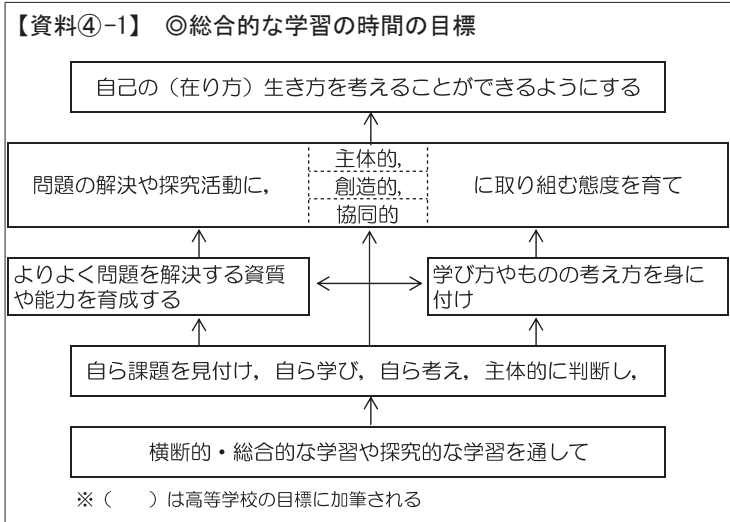
主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の（在り方）生き方を考えることができるようにする。」

これは、小学校と中学校が同じ表記で、高等学校は「自己の生き方」に「在り方」を加え、「自己の在り方生き方」としている。

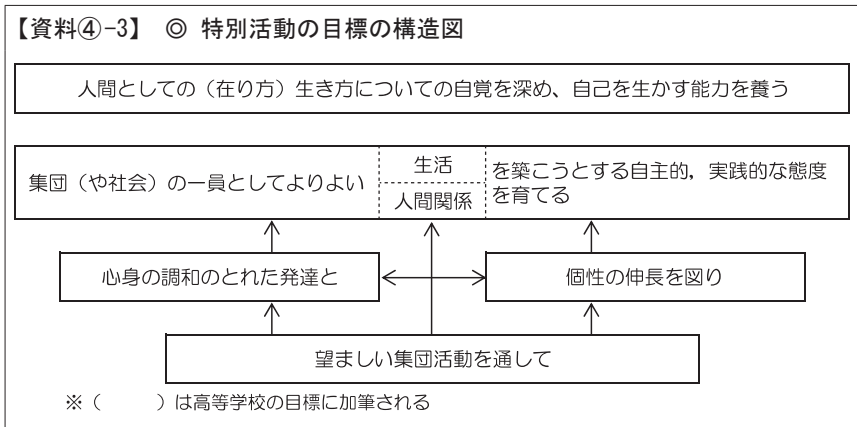
特別支援学校においては、それぞれの学校の学習指導要領に示すものに準ずるほか、「児童又は生徒の障害の状態や発達の段階等を十分考慮」すること、および「小学校の児童又は中学校・高等学校の生徒などと交流及び共同学習を行うよう配慮すること」が付け加えられた。

そこで、「総合的な学習の時間」と「特別活動」の目標を比較するために、それぞれ構造化することを試みた。それを資料④-1、④-2、④-3として示した。これを見ると、両者の目標は一見似ているように見えるが、特別活動は、「人間としての（在り方）生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」ことを究極に据えているのに対し、総合的な学習の時間は、「自己の（在り方）生き方を考えることができるようにする」ことを究極に据えている。

このことから両者の関係は、総合的な学習の



**【資料④-2】
特別活動の目標との関係**



時間に考えた「自己の（在り方）生き方」を、特別活動における集団活動を通し「人間としての（在り方）生き方」に発展させ、一般化する関係にあると考えられる。

「特別活動」を整理すると、資料④-4に示したように、学級やホームルーム、学年や全校という集団で、同一年齢だけでなく異年齢集団としても活動するところに特徴がある。

総合的な学習の時間には、特別活動に設けられた「集団活動を通して」という制限はない。したがって、教科学習と同様に個人として学習を展開することができる点も特徴である。

【資料④-4】 特別活動の特徴

内容	学校種			集団年齢の特徴		規模等
	小学校	中学校	高等学校	同一	異年齢	
学校行事	○	○	○	○	○	全校・学年
生徒会活動		○	○		○	全校
児童会活動	○				○	
学級活動	○	○		○		小学1年生は35名、他は40名が最大
ホームルーム活動			○	○		
クラブ活動	○				○	4年生以上

それらの様々な集団における活動を通してこそ、総合的な学習の時間に培われた「自己の(在り方)生き方を考えること」は、一般化され「生きる力」になると捉えている。

総合的な学習の時間の設置により、各学校では、「横断的・総合的な学習や探求的な学習」を準備し、生徒が「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断」できるように誘い、「問題の解決や探求活動に、主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て」ることに、より一層努めなければならなかった。

5 総合的な学習の時間の特徴

「総合的な学習の時間」が教育課程に加えられたが、小中学校における総授業時数の配分は年間70時間程度で、およそ7%である。高等学校でも卒業に必要とされる74単位のおよそ4～8%である。教科に費やされる授業時数は小学6年で82.1%、中学3年で86.2%と依然として高い割合であることに変わりはない。これを資料⑤-1として右に示した。

「総合的な学習の時間」と「特別活動」の関係を見ると、前の項で述べたように、「総合的な学習の時間」は、問題解決や探究活動を通して「自己の(在り方)生き方を考えることができるようにする」ことを目標とし、それを個人の学習として行うことができる。

一方「特別活動」は、集団活動を通して「人間としての(在り方)生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」ことを目標としている。

この両者の関係について、現行の学習指導要領(平成20年改訂)は、「総則」に次のよ

うに示している。

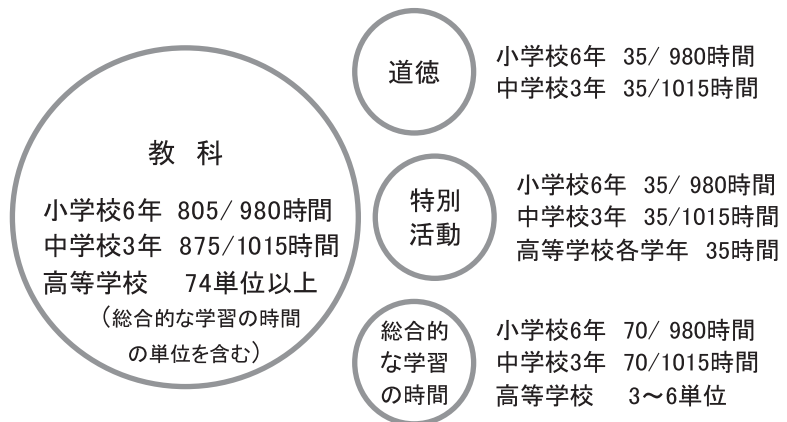
「総合的な学習の時間における学習活動により、特別活動の学校行事に掲げる各行事の実施と同様の成果が期待できる場合においては、総合的な学習の時間における学習活動をもって相当する特別活動の学校行事に掲げる各行事の実施に替えることができる。」

つまり「特別活動」は、「集団の一員としての自覚」や「自主性」を育てることをねらいとし、「総合的な学習の時間」は、探究的な学習を行い「問題を解決する力」を育てることをねらいとしているから、その違いを重んじると、一つの行事を、活動内容やねらいによってどちらかの時間に位置づけることもできる。

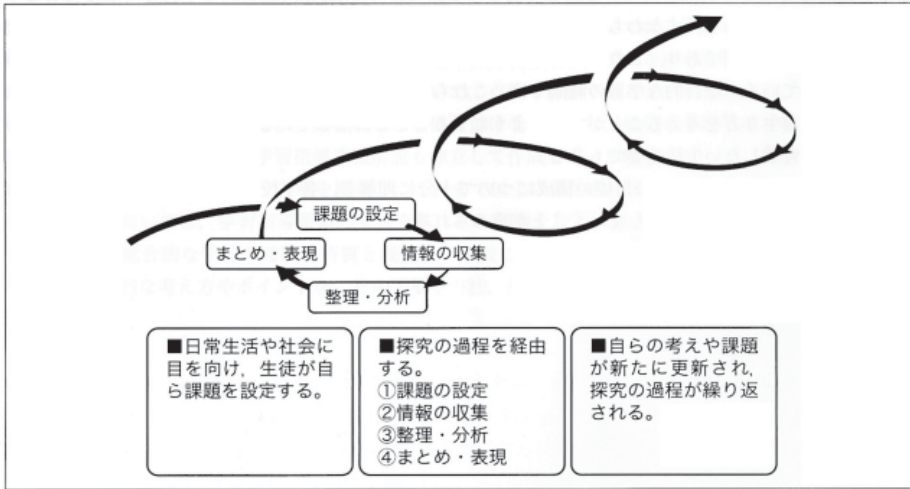
例えば、修学旅行で決まりや約束ごとを守ることの大切さや行動班や係り分担などを決めたりする場合は「特別活動」の位置づけとなり、班毎で見学場所について調べたり、交通機関や地理を調べ、行動計画を立てる場合は「総合的な学習の時間」の位置づけとすることができる。

小学校及び中学校の学習指導要領解説編「総合的な学習の時間」には「探求の過程の連続」と題して、高等学校は「探求的な学習における生徒の学習の姿」と題して資料⑤-2に紹介した図が示されている。資料は高等学校の解説書

【資料⑤-1】 教育課程における標準時数



【資料⑤-2】 探究的な学習における生徒の学習の姿



に示されたもので、小学校および中学校の解説書には図の■の欄は付されていない。このスパイラルを小学校と中学校の解説では次のように記している。

- ①課題の設定…体験活動などを通して、課題を設定し課題意識をもつ
- ②情報の収集…必要な情報を取り出したり収集したりする
- ③整理・分析…収集した情報を、整理したり分析したりして考察する
- ④まとめ・表現…気付きや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する

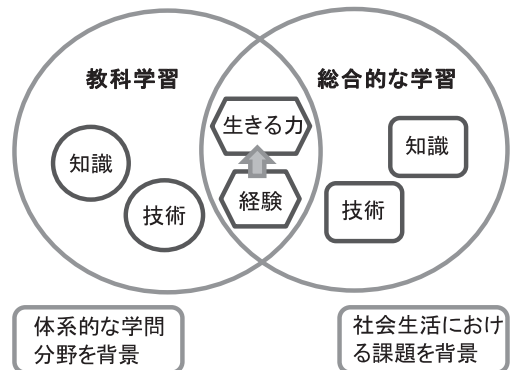
この四つの過程を繰り返すことについて、高等学校では、「総合的な学習の時間における探求的な学習とは、問題解決的な学習が発展的に繰り返されていく図のような一連の学習活動のことである。」と記している。

「総合的な学習の時間」における探求的な学習の繰り返しが「生きる力」を身に付けさせることになる、ということを意味しているのだろうが、それも教育課程の総授業時間の配分から見れば、8割を超える「教科」によって支えられていると言える。

そこで、教科学習との違いについても簡単に触れておく。教科学習は、主に体系的な学問分野を背景にした知識や技術を学ぶが、総合的な学習の時間では、児童生徒の社会生活における課題を背景にして知識や技術を学ぶことになる。資料⑤-3に示したように、両方の学習による経験の積み重ねが「生きる力」に結びつくと考える。先に示した「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」のいずれの活動においても、教科学習で得た知識や技術を用いて行う活動であることに間違いない。

したがって総合的な学習の時間は、個人の教

【資料⑤-3】 総合的な学習と教科学習の関係

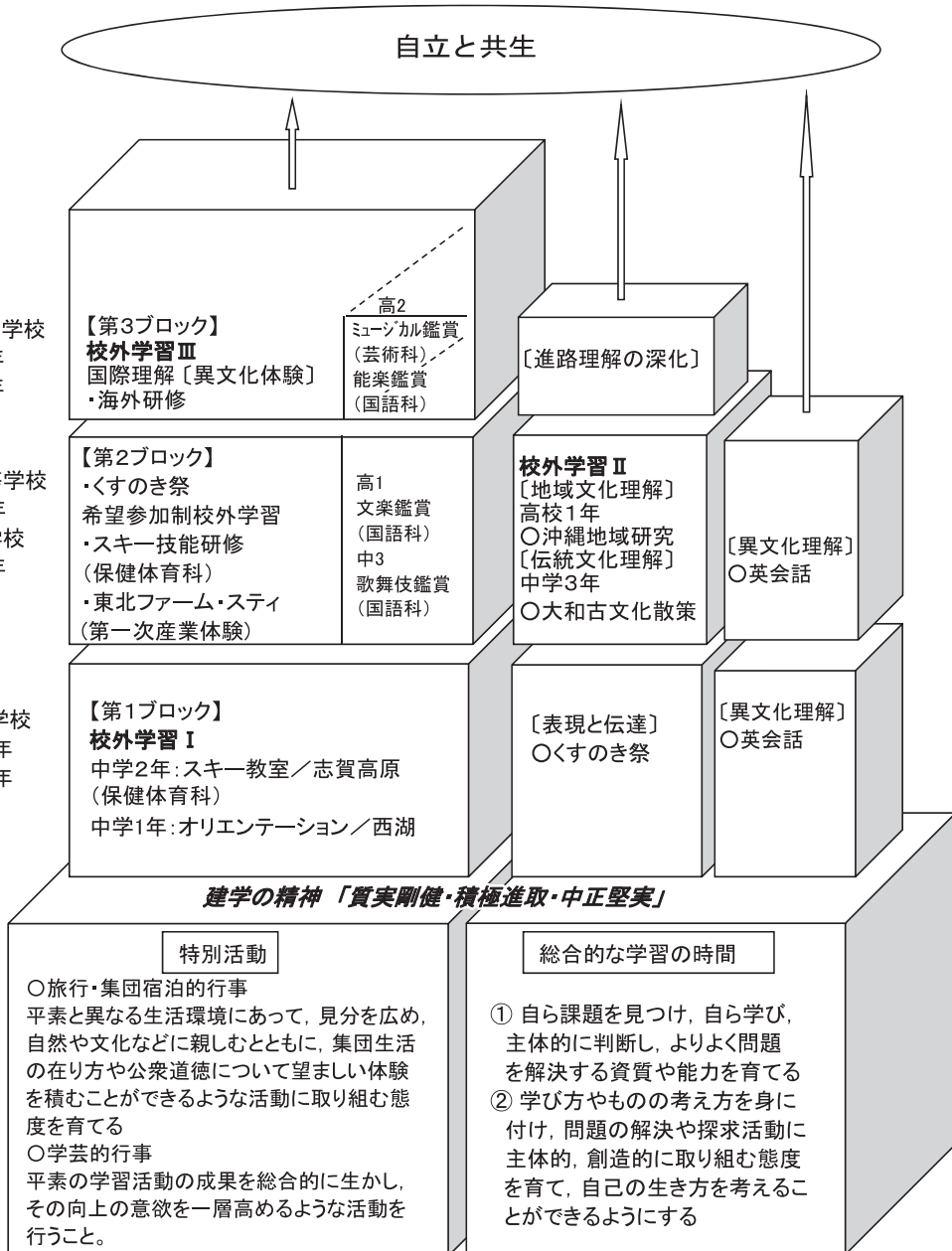


科学習の成果に応じて探求的な学習を繰り返
し、経験を重ねることで「生きる力」が養われ
ることを期待していることが分かる。そして、
この期待を補完するが「特別活動」における「望
ましい集団活動」に他ならないのである。

6 神奈川県立大学附属中・高等学校での試み

筆者がかつて勤めた神奈川県立大学附属中・高等
学校では「一定のまとまった時間（総合的な学

【資料⑥-1】 神奈川県立大学附属中・高等学校の「特別活動」と「総合的な学習の時間」の構造



習の時間)を設けて横断的・総合的な指導を行うこと」の発表を受けて、教育課程の検討を開始した。前頁の資料⑥-1は、筆者が副校長として整理したものである。

検討に当たっては、総合的な学習の時間に新たなことを行うのではなく、開校以来行ってきた旅行・集団宿泊の行事の「校外学習」と学芸的な行事の学園祭である「くすのき祭」を整理して編成することとした。

この判断には、新教育課程編成に向けて行った校内研修での東京大学教授 佐藤学氏の助言が大きな力になったので、次に氏の著書からその部分を紹介する。

総合学習が混乱してしまう一つの責任は、このブームに便乗している教育雑誌の編集者や教育学者や教育評論家にある。「クロス・カリキュラム」とか「横断的学習」とか「生きる力」とか「自己教育力」とか、流行の言葉が飛び交い、その流行語によって、ますます教師は混乱に陥っている。

そもそも「総合学習」が混乱してしまうのは、教師自身が教えたい内容や子どもと共に追求したい主題がないからだろう。環境問題にしる、国際化や情報化の問題にしる、他人事ではなく自分自身の問題として受け止めてきた教師たちは、学習指導要領が「総合的な学習の時間」を設定しようがしまいが、これらの問題を主題とする学習をこれまでも実践してきたし、現在も実践している。あれこれのブームや流行語に踊らされる前に、今子どもたちと共に探求すべき主題を一つでも二つでも教師自らのものとして、一時間でも二時間でも自らの教室で試みてみることである。

(佐藤学『教育時評1997～1999』)

資料⑥-1に示した諸行事は、その後に見直しを行い、現在はいくつかの変更がみられるが、第一ブロック(中学1年2年)で「くすのき祭」、第二ブロック(中学3年高校1年)で「校

外学習」、第三ブロック(高校2年3年)で「進路理解の深化」を総合的な学習の時間の柱としている点は変わらない。

更に、第一ブロックと第二ブロックでは、週1時間の「英会話」の授業を設け、国際理解を進める一助とした。これは一つの学級を二つに分け、二人のネイティブと一人のコーディネーターで展開した。

特別活動における「校外学習」「くすのき祭」「鑑賞教室」と「総合的な学習の時間」を有機的に統合し、異文化理解を進めることで「生きる力」を養うことができると考え、目標に「自立と共生」を据えた。

総合的な学習の時間と校外学習の扱いについては、当時、筆者が整理したものがあるので次に資料⑥-2として紹介する。

【資料⑥-2】

総合的な学習の時間と校外学習の扱い

2002.07.01 策定/2005.10.31 修正

第1ブロック【校外学習Ⅰ】

テーマ：自然と環境

内容：総合的な学習として、社会科地理的分野の地域観察を軸に、中学1年生で横浜およびその周辺地域においてテーマ別の研修を行う。地域に根差した産業や環境との関わりなどの学習を通し、調査・検証・整理・発表などの学習方法を獲得させる。

中学2年生では、生涯体育のひとつとしてスキーの基礎的な技能を修得させる。また、中学2年生の希望者により、東北で第一次産業体験学習を行う。

(1) 中学1年

① オリエンテーション (主管部署：担任会)

[目的] 集団生活のルールを確認するとともに、生徒間および生徒と教師の相互理解を図る。併せて、自然と環境の問題に触れさせる。

② 地域調査 (主管部署：担任会+社会科)

[目的] 中学1年生社会科で学習する地域観察を軸にテーマを設定して、調査・見学・体験・

検証を日帰りで行う。併せて、交通道德などの社会生活上のマナーを体験的に学習させる。

(2) 中学2年

① スキー教室

(主管部署：担任会+保健体育科)

[目的] 生涯体育のひとつとしてスキーの基礎的な技能を修得させるとともに、雪国の生活に触れさせる。

② 東北ファームステイ

(主管部署：担任会+社会科)

[目的] 第一次産業における生活を体験するとともに、食糧生産にかかる諸問題を発見させる。

◎内容の取り扱い

1. 上記(1)①は、全員参加制とし、担任会が中心になり、4月下旬に西湖周辺において2泊3日で行う。
2. 上記(1)②は、全員参加制とし、担任会が中心になり教科と連携をとり指導に当たる。なお、宿泊は伴わない。なお、「現地調査」および「発表」にかかる時間は、「総合的な学習の時間」の集中的運用として扱う。また、学習成果を「くすのき祭」で発表させる。
3. 上記(2)①は、全員参加制とし、担任会が保健体育科と連携をとり、1月上旬に4泊5日で行う。
4. 上記(2)②は、希望参加制とし、担任会が中心になり海外・国内研修委員会の意向を受けて、夏季休業間中に2泊3日で行う。

第2ブロック【校外学習Ⅱ】

テーマ：文化と産業

内容：総合的な学習として、体験、観察、聞き取り調査を中心に、日頃体験できない日本を知り、国際理解の基礎を築く。中学3年で「大和古文化散策(奈良)」を、高校1年生の「沖縄」で沖縄本島と八重山の地域から選択して地域研究を行う。

また、中学2年生で生涯体育のひとつとし

て習得したスキー技能を発展させる研修を行う。

(1) 中学3年

① 大和古文化散策

(主管部署：担任会+国語科+社会科)

[目的] 日本の伝統的な文化に親しむとともに、文物保存や環境保護に対する理解を図る。併せて現代社会との接点を見だし、課題として捉えさせる。

② スキー技能研修

(主管部署：保健体育科)

[目的] 中学2年生で生涯体育のひとつとして習得したスキー技能を発展させる。

(2) 高校1年生

① 沖縄地域研究

(主管部署：担任会+国語科+社会科+理科+芸術科)

[目的] 琉球文化に触れ、亜熱帯気候における生活観察を通して、各自が設定したテーマに基づき、調査・見学・体験・検証を重ね、研究レポートを作成させる。

② スキー技能研修

(主管部署：保健体育科)

[目的] 中学2年生で生涯体育のひとつとして習得したスキー技能を発展させる。

◎内容の取り扱い

1. 上記(1)①および(2)①は、全員参加制とし、担任会が中心になり関係教科と連携をとり指導に当たる。事前学習および事後の整理については「総合的な学習の時間」に行い、「現地調査」にかかる時間は、「総合的な学習の時間」の集中的運用として扱う。時期は12月中下旬に3泊4日で行う。
2. 上記(1)②および(2)②は、については、希望参加制とし、海外・国内研修委員が中心となり、春季休業期間中に4泊5日で行う。

第3ブロック【校外学習Ⅲ=海外研修】

テーマ：異文化体験

内 容：参加者が同質の体験をするという学年を単位とした校外学習の発展であり、その質的な完成を目指す。よって、教科を中心に「動機付け」で終えるのではなく、しっかりとした問題意識とそれを最後まで追究する学習を行う。

(1) 国際理解

① 中国研修

(主管部署：地理歴史科)

[目的]

1. 既習の中国の歴史舞台を訪れ、その遺跡・文物の実見を通して歴史を再認識させる
2. 現代中国が抱える重要な社会問題である人口問題、環境問題について中国の政策担当者からレクチャーを受け、認識を深める。
3. 中国と日本を比較考察しながら、これからの日本の歩むべき道を考察する。

② 東南アジア研修

(主管部署：公民科)

[目的]

1. 経済成長を遂げる東南アジアを体感する。
2. 多民族国家の問題と教育から成長の要因を考察する。
3. 東南アジアに進出した日本企業を訪問し、その役割とねらいについて理解を深める。

③ イギリス・イタリア研修

(主管部署：英語科・芸術科)

[目的]

1. College（語学コース）での英会話学習を基本に College での Excursion やホームステイを通してイギリスの生活文化を体験する。
2. メイン・テーマである「ルネサンス」の芸術を鑑賞し、自らのテーマ理解を深める。

④ オーストラリア研修

(主管部署：英語科)

[目的]

1. 英語・英会話研修によりコミュニケーション能力を向上させる。
2. ホームステイを通してオーストラリアの生活文化を理解する

3. フレーザー島や大学での環境保護の実践からオーストラリアの環境保護への取り組みを理解し、考察する。

4. 先住民(アボリジニ)の伝統的文化からオーストラリアの歴史理解を深める。

⑤ ニュージーランド研修

(主管部署：理科)

[目的] 自然観察を通して、自然の雄大さを体感し、その不思議さを体験させることから自然を人間と動植物が共有し共生するための課題を導きだし、考察させる。

※高校2年生の夏季休業期間に、中国の文物保護および中国社会が抱える現代的諸問題の学習を1週間行なう

(2) 課題研究

① 進路について考察する学習活動

進路への意識を高め、将来の自己の行き方を選択する能力を育成することをねらい、週1時間の活動を学年担任が企画し計画的に行なう。

② 興味・関心に応じて知識や技能の深化を図る学習活動

希望する個人またはグループが、それぞれに設定した課題に基づいて調査・研究を行い、研究レポートまたは論文にまとめる指導を行なう。

[例]

情報・環境・福祉・健康など横断的なもの
理科・科学論文、平和学習、古典研究、初等整数論、ボランティア、小説評論、トレーニング理論、デザイン史など

◎内容の取り扱い

上記(1)については、事前・事後の学習は、土曜講習として行ない、現地研修を含め「総合的な学習の時間」の集中的運用として扱い、「国際理解」1単位を認定することが出来る。希望選択制とする。

上記(2)の①は、高校2年生全員に履修を課す活動として行なう。「総合的な学習の時間」の「課題研究」1単位を認定することが出来る。

(2)の②は、希望する生徒が希望する教員

との合意の上で行なう活動で、事前・事後の学習は土曜講習として行なう。「総合的な学習の時間」の「課題研究」1単位を認定することが出来る。

「ニュージーランド研修」は、緊急避難的なもので、1999年3月から2001年3月までは、アメリカ合衆国イエローストーン公園で大型哺乳動物の観察を行った。しかし、2001年9月11日の同時多発テロにより継続が困難になり、2002年3月には急遽、鹿児島県屋久島で植生の垂直分

資料⑥-2で紹介した第3ブロックの国際理解

【資料⑦-1】総合社会（沖縄）学習計画 / 1998年度 担当：澤田

1. 沖縄の地理的特徴

- ① 位置と島嶼（とうしょ）
- ② 行政区分と人口
- ③ 主な市町村
- ④ 地形と気候

- ⑦ 米軍の上陸と日米最後の決戦
- ⑧ 米軍の沖縄上陸直前の状況
- ⑨ 沖縄本島中部・首里戦線
- ⑩ 首里戦線
- ⑪ 離島戦線
- ⑫ 南部戦線

2. 沖縄の自然

(1) 海と陸の狭間

- ① サンゴ礁と干潟
- ② マングローブと生物

(2) 沖縄の動物

- ① 蘇ったリュウキュウアユ
- ② 貴重な昆虫
- ③ ヤマネコとマングース

(3) 沖縄の小さな植物

6. 沖縄の基地

(1) 米軍占領から対日平和条約発効前

- ① 土地の囲い込み
- ② 米軍の占領政策の変化
- ③ 開放地の再接収
- ④ 条約前の土地接収の違法性

(2) 平和条約発効から沖縄返還まで

- ① 対日平和条約発効
- ② 長期賃貸借契約の失敗
- ③ 銃とブルドーザーによる土地強奪
- ④ 島ぐるみ闘争
- ⑤ 布告20号以後の軍用地問題
- ⑥ 条約後の土地接収の違法性

(3) 沖縄返還協定と軍事基地

(4) 沖縄返還後の強制収容

- ① 「公用地法」の制定
- ② 「地籍明確化法」の制定
- ③ 「駐留軍用地特借法」の制定

3. 沖縄の産業

- ① 農業
- ② 観光産業
- ③ 基地産業
- ④ 伝統的な産業

4. 沖縄の歴史

- ① 琉球と沖縄
- ② むらからくにへ
- ③ 海外発展の時代
- ④ 島津の進入
- ⑤ 王国末期
- ⑥ 藩から県へ
- ⑦ 太平洋戦争と沖縄
- ⑧ 本土復帰

7. 環境破壊

- ① 自然環境破壊
- ② 騒音公害

5. 沖縄戦

- ① 沖縄守備軍の創設と臨戦態勢
- ② 沖縄守備軍の動き
- ③ 10.10空襲の前後
- ④ 戦場動員状況
- ⑤ 戦時行政から戦場行政へ
- ⑥ 国体護持と沖縄戦への突入

8. 米軍基地と子どもの権利

- ① 実弾砲撃演習
- ② パラシュート降下訓練
- ③ 嘉手納飛行場
- ④ 普天間飛行場

〈研究テーマと見学コース策定〉

布の観察を行い、その後ニュージーランド研修に変更し、そしてアフリカのケニアで当初のねらいである大型哺乳動物の観察に繋いだ。政局の不安定で2010年からはハワイ島で研修を行っている。

現在は、他にも検討を経て変更されているものがある。

7 沖縄地域研究について

総合的な学習の時間における「自己の(在り方)生き方を考えること」を、特別活動における「人間としての(在り方)生き方についての自覚を深める」実践例として第2ブロックの校外学習Ⅱ、沖縄地域研究の取り組みを紹介する。

これは、「総合的な学習の時間」の試みとして、それまでの沖縄校外学習を踏まえ、探求的な活動を中心に作り替えたものである。

まず、中学3年生の社会科に週1時間の「総合社会」を設け、地理分野・歴史分野・公民分野で学んだ見方や考え方を「沖縄」をテーマに総合的に捉えることを試みた。内容は資料⑦-1に示した学習計画で、筆者が担当した。もちろんテキストはなく、全て自作のプリントによる学習であった。

さらに沖縄に関する知識を補完するため、沖縄県教育委員会が編集している「沖縄の歴史」を求め、全生徒に夏季課題として配付し、興味の発掘にも努めた。冬季休業期間には石垣島と西表島を訪ね、収集した資料で教材の補完に努め、「研究テーマ」作成の資料として提供した。

高校1年では、5名の学級担任中3名が交代したが、筆者が学年主任として留まり、12月実施の沖縄地域研究を推進した。8月には沖縄の実踏も行い、法人施設の保養所で担任による宿泊研修を実施して、3コースの引率担当を決め、改めて、見学コースの検討を行った。合わせて、沖縄南部コースではひめゆり平和祈念資料館副館長・証言員の宮城喜久子先生、沖縄北部コー

スでは、沖縄自然保護協会会長・シアトル大学東アジア校理事長の金城 栄喜先生、八重山コースでは、WWF (World Wide Fund For Nature) サンゴ礁保護研究センターの小林 孝先生が、それぞれ現地講師としてサポートして頂けることを確認した。

生徒への働きかけは、4月の学級開きの際の旅行委員の募集から始めた。保護者へは、4月の学年保護者会で計画の概要を説明した。旅行委員会の活動は週1～2回で、沖縄南部、沖縄北部、石垣島のコースに分かれ、それぞれ「自然・文化・社会・産業」の分野でのモデルコースを作成する作業から始めた。

そして、それをもとに3コースの希望を募り、選択コース、更には自主研修コースの作成と繋げていった。

次に資料⑦-2として生徒に提示した「地域研究の手順」を紹介する。

【資料⑦-2】 沖縄・地域研究の手順

手順① 研究テーマの再確認

※共同研究の場合は個人の分担とテーマとの関係を明確にする

手順② 資料収集(第1回)→10月24日(土)まで

- ・書籍
- ・データ
- ・パンフレット
- ・写真

現地で収集した資料もファイルに整理できるような工夫を

これらは必要な部分をコピーするか、メモをとり、それをファイルに綴じておく。多いほど後が楽。その際に必ず出典を明記しておく。

※出典(書籍名・筆者・出版年・出版社)

手順③ 内容構成→11月24日(火)まで

- ・レポート内容を幾つかの柱を立てて構成する。
- ・その柱(項目)に従って資料を分類整理する。
- ・不足している項目の資料を再度収集する。

※小項目ごとにインデックスをつけておくこと
便利

手順④ フィールドワークの課題決定

→11月24日(火)まで

※沖縄で何を調査・見学・体験・収集するのか明確にする

※用紙は別途配付

手順⑤ 現地調査（フィールドワーク）の結果整理→1月9日（土）まで

- ・調査の内容を整理する
- ・収集資料を整理する

※講演会メモ・パンフ・写真・聞き込み記録など

手順⑥ 研究レポートを書き上げる
→2月27日（土）まで

【注意】

1. 右の頁を切り取って、ファイルの表紙に貼り、必要事項を記入する

98					
MY OKINAWA NOTE					
神奈川大附属高等学校		1年 組	番	氏名	
コース	コース	行動班	班	班長 組 氏名	組
地域研究テーマ					
共同研究の場合は、個人が分担するテーマ					
【点検表】					
	締切期日	提出日	合否	点検者印	再提出・備考
手順①	10月24日	/			
手順②	10月24日	/			
手順③	11月6日	/			
手順④	11月14日	/			
手順⑤	1月9日	/			

ホームルームは解体して、生徒の興味と関心にもとづいて班を編成した。課題のレポートは共同研究として分担を明確にする者の他は、個人のテーマによることとして進めた。

テーマを作成する際は、疑問文を用い、レポートはそれに答えるものを基本とし、収集した資料から仮説を立て、現地では検証を試みることを中心にした。

検証は、現地で尋ねることを基本とし、出会った人のことばをレポートに記すことを進めた。そうすることで、模倣ではない、自分だけのレポートになることを学ばせた。

したがって、バスのコースは生徒の希望の最大公約的なものとし、乗車は班単位で選択させた。1日目と2日目の乗車人数の違いはそこから生じたものである。

レポートの作成に当たっては、ホームルーム担任とコース引率責任者が点検し支援した。

完成したレポート集の題名は、旅行委員会でも検討し、「ミーカジ（新風）」とした。副題に「沖縄の心に学ぶ」を添えた。

この学年の取り組み以降、沖縄のレポート集は同題名で編集されている。

またこの学年の生徒の出会いが次の学年へ繋がり、沖縄でのネットワークを形成する先導的役割も果たした。

8 おわりに

筆者は先に紹介した「沖縄校外学習」に出発する5日前に副校長を命じられた。実施はもとより、「ミーカジ」の編集も、副校長・学年主任・学級担任の業務を担い、同時に石垣島コースの責任者として生徒のレポート作成を支援した。

生徒は、高校2年に進級した4月1日に第1回海外研修（中国）へ9名の希望生徒が出かけた。これにも筆者は同行した。夏季休業期間には東南アジア（マレーシア、シンガポール）研修や語学研修でオーストラリアのパースに出かけ、3月の春季休業ではイギリス・イタリアヘルネサンスをテーマとする研修やイエローストーン公園にも出かけた。それらのレポートも沖縄地域研修のレポートと合わせてAO入試に用いられた。

資料⑥-1で紹介した構造、つまり「特別活動」と「総合的な学習の時間」を統合し「生きる力」として「自立と共生」を目指した構造が、この

《本島南部コース》 [男子 38名, 女子 40名, 計78名+引率教師 4名/◎戸羽・大庭・山崎・廣田]

1998.11.7 文責:澤田

【資料⑦-3】 沖縄南部コース行程表

月日、曜	行 程	交通機関	食 事	宿泊施設
12月16日 (水)	<p>ANA83 羽田空港ターミナル集合 (9:45Am) 羽田空港 ——— 那覇空港 ——— (荷物は那覇空港～ホテル, トラック一括輸送) 10:45 13:30 13:50</p> <p>[1号車] 読谷村戦跡巡り(比謝川河口展望台/米軍上陸地・FBIS・トリスティン・象の檻・ヒビリガマ・シムカガマ) 14:50～ 16:00</p> <p>[2号車] 北谷淡水化施設見学 ——— 座喜味城址(歴史民俗資料館) ——— 佐喜真美術館 ——— ホテル 14:40～ 15:40 16:00～ 16:30 17:00～ 17:45 18:30</p>	ANA 琉球バス 1号車 36名 2号車 42名	昼食 羽田空港で弁当 機内で食事	那覇 沖縄ホテル 〒902-0066 那覇市大道35 tel 098 884-3191 fax 098 885-2102
12月17日 (木)	<p>ホテル ——— 旧海軍司令部壕 ——— 豊見城公園(野戦病院壕) ——— ひめゆりの塔 8:30 9:00～ 9:50 10:00～ 11:00 11:20～ 11:40</p> <p>朝食(ひめゆり会館) ひめゆり祈念資料館 ——— 摩文仁の丘(県立平和祈念資料館・平和の礎・各県慰霊塔 11:40～ 13:00 13:20～ 14:40</p> <p>・黎明の塔) ——— アプチラガマ(案内人による説明) ——— ホテル 15:00～ 16:00 16:50</p> <p>(18:00夕食 19:30～20:45 講演会 :講師 ひめゆり祈念資料館 宮城喜久子先生)</p>	琉球バス 1号車 39名 2号車 39名	ひめゆり会館 弁当	フェイスオアル 石嶮 スリッパ ドライヤーは大浴場に備付け
12月18日 (金)	<p>(荷物移動) 沖縄ホテル 南西観光ホテル ——— フリープランⅠ, スタート 8:30 8:50 8:30～ 17:30</p> <p>観光タクシー利用 (5名/旧海軍病院壕→白梅の塔→真壁4人壕跡→魂魄の塔)</p>		各自自由食	南西観光ホテル 〒900-0013 那覇市牧志 3-12-23 tel 862-7144 fax 862-7110
12月19日 (土)	<p>ホテル ——— フリープランⅡ, スタート 琉球バス営業所 ——— 那覇空港 ——— 羽田空港 9:00 9:10～ 13:10 13:20(集合) 13:30 13:50 14:30 16:50</p> <p>(荷物はホテル～那覇空港, トラック一括輸送, 羽田受領)</p>	琉球バス ANA	那覇市内で 各自自由食	
経路凡例	<p>————— 航空機 ——— 貸切りバス 徒歩</p>			

《本島北部コース》

[男子 21名 女子 20名 引率教師 2名/◎永石・内園]

1998.11.7 文責:澤田

【資料⑦-4】 沖縄北部コース行程表

月日、曜	行 程	交通機関	食 事	宿泊施設
12月16日 (水)	ANA83 羽田空港ターミナル集合 (9:45Am) (荷物は那覇空港～ホテル,トラック一括輸送) 国道58 読谷村(沖縄黒糖工場/WC休憩) 14:50～ 15:20 万座毛ビーチ 15:50～ 16:20 ホテル 17:45	ANA 琉球バス	昼食 羽田空港で弁当配付, 機内で食事	本部 ロイヤル ビューホテル 〒905-0206 国頭郡本部町 石川938
12月17日 (木)	フリープランⅠ,スタート ホテル 8:30 本部港 8:50 伊江港 9:00 伊江島散策(レンタサイクル,雨天時はバス/アーニーパイル碑・ニヤティヤ洞 米軍補助飛行場・湧出(わじー)・湧出展望台・リーフィルド・城山(伊江島タッチェ)・伊江ビーチ・戦争資料館) 9:30～ 13:10 伊江港 13:00 本部港 13:30 名護博物館 13:40 名護パーク沖繩 14:30～ 15:20 沖繩フルーツランド 15:40～ 16:30 ホテル 16:40～ 17:20 17:50	伊江村営 フェリー 琉球バス	伊江島にて 弁当(軽食) を配付	tel 0980 48-3631 fax 48-3639 ジャンプ・リンス,ハブラン セット,バスタオル,石鹸, フェイスタオル,ドライヤー はフロントで貸出し20 台
12月18日 (金)	(山原・本部・東シナ海・太平洋の眺望) (山原自然林の説明+環境問題について・乗車して説明/理学博士 金城栄喜先生) ホテル 8:00 いこいの森おきなわ(多野岳) 9:00～ 9:20 名護城址(県立名護自然公園・名護青年の家/昼食) 10:00～ 12:40～ 13:00 名護城址 13:00 大浦湾(マングローブ観察) 13:30～ 13:50 琉球村 14:30～ 16:30 ホテル 17:50 海洋博記念公園散策 ホテル	琉球バス	名護青年 の家で弁当 海洋博公園 見学者は, 自由食	南西観光ホテル 〒900-0013 那覇市牧志 3-12-23 tel 862-7144 fax 862-7110
12月19日 (土)	ホテル 9:00 フリープランⅡ, スタート 9:10～ 13:10 (荷物はホテル～那覇空港,トラック一括輸送,羽田受領) 琉球バス営業所 那覇空港 羽田空港 13:20(集合) 13:30 13:50 14:30 16:50	琉球バス ANA	那覇市内で 各自自由食	
経路凡例	—— 航空機 ——— 貸切りバス ——— 船舶 徒歩			

《石垣島コース》

[男子 50名, 女子 21名, 計71名+ 引率教師 3名 / ◎齊藤・今給黎・澤田]

石垣島[周囲162.2km, 面積222.46km², 人口41,777人]

西表島[周囲130km, 面積289.27km², 人口1887人]

1998.12.1 文責:澤田

【資料⑦-5】石垣島コース行程表

月日, 曜	行 程	交通機関	食 事	宿泊施設
12月16日 (水)	羽田空港ターミナル集合完了(7:45Am) ※荷物を預ける者は7:30集合 JAL901 JTA609 羽田空港 — 那覇空港 — 石垣空港 — バンナ展望台 — 川平湾(グラスボート) 8:15 11:00 11:45 12:45 13:10 13:30~ 13:50 14:30~ 15:30 米原ヤエヤマヤシ群落 — 吹通川(ふきどおがわ)のヒルギ群落 — 玉取崎展望台(ハイビスカスの丘) 15:45~ 16:10 16:15~ 16:30 16:45~ 17:05 津波大岩 — ホテル着 17:35~ 17:50 18:10	JAL JTA 東運輸 貸切バス 1号車 36名 2号車 36名	機内食 (サントイッチ+フルーツ+ジュース) 昼食 那覇空港で弁当 機内で食事	石垣島 ホテルミヤヒラ 〒907-0012 石垣市美崎町 4-9 tel 09808 2-6111 fax 09808 3-3236
12月17日 (木)	[1号車] ホテル... 石垣港離島棧橋 — 西表島大原港 — 野生生物保護センター — 由布島/ 8:20 8:30 8:40 9:15 9:25 9:45~ 10:20 10:50~12:40 由布島植物園(昼食) — ピナイサーラの滝(車窓見学) — 浦内川観光ボート&徒歩散策(カンビレーの滝 13:20~ 16:20 ・マリユドゥの滝, 徒歩往復2時間) — 星の砂浜 — 船浦港 — 離島棧橋 ホテル 16:30~16:50 17:00 17:10 18:00 18:10 [2号車] ホテル... 石垣港離島棧橋 西表島船浦港 — 浦内川観光ボート&徒歩散策(カンビレーの滝・ 8:10 8:20 8:30 9:10 9:20 9:40~ 12:40 マリユドゥの滝, 徒歩往復2時間) 昼食(レストラン浦内) — 星の砂浜 — ピナイサーラの滝(車窓見学) 12:50~13:30 13:40 14:00 由布島/由布島植物園 — 野生生物保護センター — 大原港 — 離島棧橋 ホテル 14:30~15:40 16:00 16:30 16:50 17:00 17:50 18:00 (18:20夕食, 19:00~20:30 講演会 :講師 WWF小林 孝先生)	平田観光 1号車 36名 2号車 36名	1号車 由布島 レストラン 沖縄風 幕の内弁当 2号車 レストラン 浦内 沖縄風 幕の内弁当	シャンブー リンス 歯ブラシセット バスタオル フェイスタオル 石鹸 ドライヤー が各部屋に
12月18日 (金)	フリープラン(ホテル8:20発) 石垣レンタサイクル (1日=13台 午後半日=23台) 竹富島往復 38名, 竹富島レンタサイクル(午前半日21台) ※竹富島[周囲9.2km, 面積5.42km ² , 人口262人]	レンタサイクル &竹富島 平田観光	各自自由食	
12月19日 (土)	ホテル — 八重山民俗園 — 石垣空港 — (宮古島経由) — 羽田空港 9:00 9:20~ 10:40 11:00 11:55 15:20	東運輸 貸切りバス JTA	機内食 石垣空港 弁当配布	
経路凡例	—— 航空機 ——— 貸切りバス ——— 船舶 徒歩			

沖縄地域研修を通して作られていったといっても過言ではない。

筆者は副校長を経て、2003年からは校長として沖縄地域研修を担当する教員の実践に同行して、沖縄ネットワークの構築に努めた。これには、現地講師を務めて頂いた方々を始め、近畿日本ツーリスト横浜教育旅行支店の絶大な協力を得た。

最後に、ひめゆり平和祈念資料館副館長の宮城喜久子先生には、沖縄ホテルでのご講演を恒例とさせて頂いた。そして神奈川大学附属中・高等学校が創立25周年を迎えた2009年11月には、附属学校の後援会である緑萌会の援助で、附属学校にお招きしてご講演を頂くことができた。2012年3月に校長退任の挨拶に伺った折には、お孫さんが一緒に資料館で働くようになったと喜ばれていたが、2014年12月31日にひめゆり学園の同窓生のもとへ旅立たれた。先生が若い人たちに託した講演概要を筆者のメモから整理し資料⑧-1として紹介する。

先生は、いつも講演の最後に「平和は、武器がつくるのでない」「大切なのは『ことば』」「対話によって理解し合える」と語られ、そして平和な国を「若い皆さんがつくってください」と結ばれていた。

神奈川大学附属学校で宮城先生の講演を聴いた生徒と同様、大学で特別活動論を学ぶ多くの学生にも、宮城先生の想いが伝わることを願ってやまない。

【資料⑧-1】

1998年12月から2011年12月の間に沖縄ホテルに於いて行われた宮城喜久子先生講演概要

(1) ひめゆり学園

このホテルから歩いて5分位のところに「ひめゆり学園」がありました。全寮制の学校で、長期休みの時のみ学園が休みでした。私たちも皆さんと同じように、普通の女子高生でした。クラブ活動もありましたし、ともだちと買い物

にも出かけました。3学期の3月になったらプールに入ることができました。その3月に、突然、戦場に行かされたのです。

戦争はカッコいいと思っている人もいるかもしれませんが、ほとんどのともだちは二度と帰れませんでした。資料館に写真があるだけです。

学園のあった場所には、現在は那覇市立の小学校が建てられています。グラウンドの角にひめゆりの像が立っています。私たち31名のクラスメートは16歳でしたが、戦後に「奇跡の1マイル」と言われた国際通りを通って、240名の女子生徒が夜中に戦場に出発しました。その時の学園の門は、今も残っています。時間があつたら見てください。

(2) 資料館の設立

戦後、6月23日に慰霊祭が行われてきましたが、40年が過ぎるまで戦場に行けませんでした。戦後といいますが、世の中は変わったのでしょうか。すぐに朝鮮戦争が始まりました。そして、やっと終わったと思ったらベトナム戦争に10年間で費やされました。資料館を訪れた小学6年の生徒に「どうして、また戦争をするんですか」と言われました。皆さんは答えることができますか。

沖縄は、戦後27年ぶりに日本になりました。その時に沖縄の人は当然「基地」も無くなると思っていました。でも、今でも続いています。日本国土の1%しかない沖縄に、日本にある米軍基地の74%があるのです。何も変わっていないのです。

私は、戦後40年目に初めて沖縄戦の映像を見ました。見て呆然としました。私はあの中に3か月間もいたのだと。その時、頭に浮かんだのは、戦場で聞いた解散命令です。看護助手として動員されていた私たちは、敵の攻撃が激しくなると、上官からこれ以上は団体行動ができないと言われ、負傷して泣き叫んでいる8人の友人を置いて「濠」を出てきました。あの人たちはどうしたのだろうと40年経って思い出し

ました。

そして、ようやく看護活動をした「濠」を訪ねました。缶詰の缶に石油を入れ、包帯を燃やした明かりで暮らした「濠」は、骨の山でした。骨の中から赤い弁当箱が見つかりました。「中里」と彫った名前が読めました。新垣先生の弁当箱も見つかりました。弁当箱も遺骨も40年間放置されたままだったのです。

私が黙っていたら、伝えなかったら、という思いがこみ上げました。20万人の人が亡くなったことを伝えなければならないという思いが沸き起こりました。

「濠」での生活は思い出すことさえ辛い日々でした。ガス弾が投下されて入り口付近でガスを吸った人はまるで変り果ててしまいました。大勢の人が亡くなりました。チィちゃんは気が触れた様になり、誰かがつかまえていないと飛び出して行ってしまうのです。4日後には全員が亡くなりました。とても辛いことでした。だから40年間話せなかったのです。

採集した遺品を大事にしよう。何かをしなくては、と考えると、資料館をつくろうという考えに至ったのです。そこで教員の仕事を止めました。それから多くの同窓生の協力を得て、4年間で資料館が出来上がりました。それからもう19年が経ちました。

資料館は、4年前に全部新しくしました。生存者も含めて、戦場に動員された240名のひめゆり同窓生全員の写真を掲げることができました。16歳の私の写真もあります。今では映像が来館者に語りかけています。資料館の大きな力になっているのは学芸員の人たちです。琉球大学の大学院で学んできた学芸員が私たちの想いを繋いでくれています。

(3) 勤労働員

私は、13歳でひめゆり学園に入りました。鉄道に乗ると1時間で実家に帰れるのですが、なかなか帰れません。次に帰れるのは何時になるか分からないから、といわれ、4か月ぶ

りに帰りました。学園では、突然「君たちは、今後、英語を使ってはいけない。」と言われました。それまで「駅馬車」の映画も皆で見たのですが。図書館からはアメリカの本がなくなっていました。ドイツやイタリアの歌は歌っていいが、アメリカの歌はダメだと言われました。

3年生になると、スカートはダメで、下はモンペになりました。外出には名札を付けて、包帯を持つように言われました。16歳になると勉強は無くして日本軍と一緒に基地づくりの日々でした。大人は仕事に行かない。子どもは学校に行かない。そして基地をつくったのです。それが今の嘉手納のはじまりなのです。

アメリカは日本を勉強しました。だから日本の歴史的な文化財が残る京都や奈良を爆撃しませんでした。「汝の敵を知れ」といいますが、日本では「アメリカのことばは使うな」でした。アメリカのことを何も知らない日本人になっていました。そして敵が上陸してきたら竹やりで殺す練習をしていました。無知だから、信じていたのです。

私が勤労働員で行かされたのは、今の那覇空港です。雨で滑走路に水がたまると滑るから溝を掘る作業でした。毎日、怒られ、怒られ、それでも頑張ろうとともだちと励まし合っていました。どんな作業でも歯を食いしばって頑張りました。

滑走路の溝掘りの次は、首里城の下に司令濠をつくる作業に動員されました。だから、琉球文化のシンボルであった首里城は空爆でなくなってしまったのです。アメリカはしたたかに空爆を繰り返しますが、あの空爆の下で這いつくばっている人たちがいることを知っているのでしょうか。イラクでも繰り返されていますが、沖縄のことは伝えられているのでしょうか。

(4) 戦場にはルールがない

沖縄は、4回の大きな空爆がありました。昭和19年1月に始まり、昭和20年3月23日までに、

沖縄の町という町は焼き尽くされました。1500基の軍艦に包囲された沖縄で、夜間に校門を出て行った240人の女子生徒は、40近くあった病院壕で働きました。病院壕でともだちが「教頭先生、どうして砲弾が飛んでくるのですか、ここは病院でしょう」と聞きましたが、病院壕に着いたその日から、戦争にはルールが無いことを知りました。赤十字の旗を掲げていけば攻撃されないと言われていましたが、そうではありませんでした。

食事も、一日におにぎり一個を渡されただけで担ぎ込まれた兵隊さんの手当てを手伝いました。そのおにぎりも日に日に小さくなり、ピンポン玉の大きさになりました。信じられないことがおきるのが戦場でしたし、それが戦場では当たり前でした。

私たちは、学園で練習した卒業式の歌は歌うことができませんでした。

沖縄戦は、54万人の米軍に対する9万人の日本軍の戦いでした。だから、沖縄の九つの女子高と16の男子校の生徒が戦場に動員されました。女子生徒は看護助手や食事の手伝いでしたが、男子生徒は司令壕が置かれた首里城から通信網を繋ぐ労働を強いられました。また、上級生は爆弾を背負って戦車に体当たりする攻撃にも加わりました。そうして1500名もの命が失われていきました。

ともだちの新垣さんの弟さんは首里校で14歳でしたが、日本男子なんだから死ぬと手榴弾を渡されて戦車に体当たりしました。首里高校には資料館があり、先輩たちのことを学んでいます。

(5) 病院壕の生活

病院壕の仕事では、想いかべた白い包帯なんてありません。毎晩毎晩、ドッと負傷兵が押し寄せてきました。負傷兵が3000名を超えたときに、1000名を糸数壕に移しました。「学生さん、水をくれ！」と叫ぶのです。出血している人は水を欲しがりますが、水を飲ませると

更に出血して死んでしまうので、布で湿らせて口を拭いてあげるのです。それも、包帯交換と同じ頻度で繰り返されていました。

病院壕の中は、悪臭が当たり前でした。その中で一生懸命に水を運んで行ったのに次々に死んでいきました。上官から「可哀そうだろ、顔を拭いてやれ」といわれて、亡くなった兵隊さんの顔を拭きました。「戦場では死ぬのが当たり前、だから泣くな」と軍医に言われていました。

負傷兵を見ても、病気じゃないと戦争なんだ、と思われ続けていました。環境が変われば人も変わります。赤い血が、黄色い膿が、中に白い蛆がわくのです。それが戦場で蛆がわくのは当たり前、と思えるようになるのです。「学生さん、包帯を空けてみて、何かもぞもぞ動いているよ」といわれて、蛆取りをするのです。

有事法制で、全国から380名の医師が動員されていましたが、沖縄ではまったく足りないのです。看護婦の代用として女子生徒が動員されたのです。蛆虫を取り終ると「衛生兵殿、汚物を取りました。手当てをお願いします。」というのです。エソは臭いで分かると言われ、切断するために押さえつけるのです。手足の切断を見て、気を失ったともだちが衛生兵に叱りつけられました。私たちを引率していた仲宗根先生が、「この子たちは学生なのです。もう少し優しく扱ってください」とお願いすると、「教師が生温いから生徒がダメなのだ」と先生に叱りつけました。私たちは、先生に「お願いするのを止めてください、頑張りますから」と言って泣きました。

しばらくすると亡くなった兵隊さんの死体を毛布にくるんで、夜中に、壕の外の弾痕に捨ててくる仕事もさせられました。それを見ていた兵隊さんには、恐ろしい女の子だといわれましたが、それすらも当たり前のように思えました。

上級生が、食事の入った桶を壕に運んでくる

際に、足を滑らせてこぼしてしまった時は、「ご飯を食べないで生きられるか、人殺し」と罵られました。それでも耐えて私たちは看護助手の仕事が続けていました。5か月もお風呂に入っていないませんでした。精神が鍛えられて、なんでも我慢していました。そんな時に摩文仁に行けと言われました。

ともだちの貞子さんが鹿児島に送った手紙が見つかりました。出発の4日前に送ったものですが、戦場で過ごすことなど想像もしていませんでした。63年前に亡くなった、その貞子さんの時計が27名分の遺骨と一緒に、2週間前に出てきたのです。TVニュースでも紹介されました。

貞子さんに水をあげたときに、「ありがとう、少し楽になった」と言われました。食べ物は無い戦場で生きている姿を見るのは奇跡だとも言われていました。「食べ物は自分で探せ！」と言われました。6月18日、「ドカーン」という大音響、暗闇で「足がない、足がない」という叫び声が聞こえました。濠が爆撃されたのです。「お腹をやられたから、助かるはずがない。だからほかの人を助けて。」というともだちの声。この爆撃で傷ついて8名のともだちを置き去りにして、移動しました。

(6) 新崎海岸

新崎海岸まで逃れて、それでも、絶対に日本は負けないんだ、と信じていました。苦しくて、悔しくて、岩の上で泣きました。お母さんに会いたいと叫びました。皆が叫びました。青空の下を大手を振って歩きたい、とよしさんがいました。岩陰に身を潜めていると、「敵だ、敵だ」と叫んだ日本兵が目の前で倒れました。「デテコーイ、デテコーイ」という米兵の声と、自動小銃を打つ音が近づいてきました。4名の先輩がピンを抜きました。「教頭先生、もう辛い、手榴弾のピンを抜いてください」とお願いしました。「金城、勝手にピンを抜くな！」と言われて、岩を飛び下りました。

気が付いた時には、米兵が泣き叫んでいた先輩を手当てしてしていました。「ヘイ、スクールガール」と呼びかけられました。3名が助かりました。

それから、収容所に連れていかれました。四つの収容所を転々としたのですが、四つ目の収容所で母に会えました。7か月ぶりのことでした。母は、半狂乱で「生きていた、生きていた」といって抱きすくめてくれました。私は、母に「ごめんなさい」というのがやっとでした。

(7) 若い皆さんへ

今年も、一生懸命に聞いてくれてありがとうございました。

皆さんは、63年前に、生きたくても生きられなくなった人たちのためにも、しっかり生きてください。人が生きるためには条件があります。それは、平和でないと生きられないということです。平和は、武器がつくるものではありません。武器を持って、傷つけあって、手を握れますか。日本にとって只ひとつ大事なことがあります。それは「ことば」です。ことばがあるから、対話ができるのです。対話によって理解しあえるようになるのです。

日本の国が、外国のひとつから尊敬されるよう、若い皆さんでつくってください。